

はじめに

「理事長さんですよ？」

社会福祉法人むそうが世田谷区瀬田の閑静な住宅街の一角で始めた「チャイルドデイケアほわわ」に所用で立ち寄り、用を済ませて玄関に向かった僕の背中に、誰かが声を掛けてきた。

「そうですね。どうしましたか？」

僕が振り返りながら、その声の主の顔を見ると、すごい緊張の面持ち、身体に力を込めて直立している、ひとりの利用者のお母さんが立っていた。

「何か、うちのスタッフがご迷惑をお掛けしたりしましたか？何でも、言って頂いて結構ですよ」
ぎゅっと力の入った顔のまま、次の言葉を逡巡しているように見えるお母さんに、話し出すきっかけを与えようと、僕の方から声を掛けてみた。

お母さんが、意を決して腹の底から自分の思いを絞り出すといった感じで、言葉を発した。

「この場所を、うちの子どもに居場所を、お友達を作って下さって、ありがとうございます！」
そう力強く言い終わるや否や、90度を遙かに越えて頭を下げ、そのままじっと動かなくなった。

一瞬驚いて、どうしていいのかわからなかったが、そのお母さんの行動を目が見て脳に伝え、その意味をじわりと脳が味わっていくのと同時進行で、胸の辺りがぎゅっと詰まるように熱くなった。

「お母さん、顔を上げて下さい。今までがおかしかったんですよ。子どもさん、医療ケアが必要かも知れないけれど、かわいい子どもさんじゃないですか。少子化対策とか言っている世の中が、一生懸命生きようとしている命を大切にせずに、その育ちを放置していることの方がおかしいんですよ。僕は、必要なことを当たり前にしただけです」

お母さんが、僕にずっと伝えたいと思っていた言葉を言えた安堵感を顔に浮かべながら頭を上げた。そして、僕の言葉に深くうなずき、今までの怒りを思い返しているという感じで呟いた。

「病院から退院するときに、家族だけでは子どもを支えられないかもしれないと思っていたけれど、何の支援も見通しが無い状態で家に戻りました。それからは、睡眠もままならない生活。役所や相談支援センターの人に助けを求めても障がい重いから受け入れてくれる所がありませんというばかりで。保育園には入れないし、うちの子どもは医療ケアが必要な上に歩けるので、寝たままの子どもが当たり前の重症心身障がい児施設では、手が掛かって困ると言われて」

話しているうちに、みるみるその目に、涙が溢れてくる。

「私が……。この子を産んだのは罪なのかと思ったんです！」

そう言って、唇を噛み、しばらく中空の一点を見つめて沈黙した。

僕は、掛ける言葉が見つからなくて。一緒にうっすらと目に涙を浮かべるしかなかった。

人の命は地球より重いと、かつてこの国の総理大臣が言ったことがある。
今この国に、愛する我が子の命の意味を肯定出来ないほど追い込まれる母がいる。
その子どもは、心臓の鼓動を、呼吸を止めない。
とにかく生きている。必死に生きようとしている。

「でも、ほわわに来て、むそうのスタッフ達がうちの子どもを可愛いかわいって言ってくれて。
ああ、うちの子どもを本気で大事に思ってくれる人が家族以外にいるんだと思えるようになりまし
た。何より、子どもにはたくさんのお友達、私には同じ境遇で頑張っているたくさん仲間が出来
ました！」

泣いたカラスがもう笑ったというよりは、泣いたままのカラスが笑っていた。
そして、前より大きな声で力強く言った。
「本当に、本当に、ありがとうございました！」

日本中に。このような苦悩や厳しい介護生活を送っている子どもとその家族が何人いて、
一体どうやって生きているのか。

その子どもの家族の側に、誰かがしっかり寄り添い、家族だけでは背負えない重荷を一緒に背負
っているのだろうか。

医療ケアが必要であっても、その子どもは持って生まれた良いものをきちんと発揮する人生を送
る環境にいるだろうか。

全国の基礎自治体で初めて。世田谷区は行政として、この医療ケアが必要な子どもとその家族の
暮らしをきちんと把握しようとしてきました。

また、世田谷区民であり続ける、大人になった医療ケアが必要な人の暮らしも把握することで、
世田谷区で、医療ケアが必要な人も生まれてから最期まで暮らし続けることが出来る方策をしっか
り考える機会を作っていました。

すべての命が輝く世田谷区になるために。声なき声を言語化しました。感謝かんしゃです。

社会福祉法人むそう 理事長 戸枝陽基